



ちているという事なのですけれど、キリストがかしらす。教会はからだですということですので、キリストがかしらすということが強調されてる感じですね。

後半の3章のほうを見ると、「御霊の力によって強められる、働く力によって、教会がその栄光を受ける」という真ん中に、「信仰によって住んでくれる、愛に根ざして満ちあふれている」ということですので、この出だしのところの、「信仰と全ての聖徒に対する愛、信仰と愛を覚えて感謝しています」という祈りの内容と、3章の天と地の偉大な名ということですね。「一番の名の父の前に祈ります」と言っていますけど、この名前と名前、信仰と愛は、この後半ということ、この出だしと祈りが逆になってるような感じにも見えます。

1章のほうは、平和の神様、平和だとは書いてないのですが、偉大な御力によって全てを治めている王様、平和の君なのです。平和の君である王様を御霊によって知ると。そうすると、ソロモンのことを思い出します。知恵のあるソロモン。後半のこの3章のほうは、信仰と愛に根ざしているということで、どちらかというと、愛の方が強調されている。信仰と愛が満ちてるよという意味で、ダビデと。平和の君(1章)と愛の教会(3章)という2つの区分になるのではないかと思います。

目が開かれてということが書いてあったりしますので、これはアダムがサタンに言われるところですね。その善悪の知恵の木の実を取って食べると目が開かれると言ったりしていますが、そういうところも思い出すものだと思いますけれども、知恵のある王(1章)と愛に満たされている教会(3章)ということが、この祈りで求められていることで、愛のほうを別の言い方で言うと、恵み。平和の君のほうは、平和ということですので、「恵みと平安」ということが2つの違いとして言われ区別できるんじゃないかと。こちらは(1章)かしら側、こちらは(3章)からだ側ということ祈っている枠組みなのではないかと思っています。

「国と力と栄えとは」は、国と力と栄光が褒め称えられるようにと、主の祈りの終わりのところに付いていますよね。後で付けたようですけども、第1歴代誌の29章の辺りから来ています。国と力と栄えが、国の力と栄え。力と栄えによって国が成立すると堅く建てられるということですね。この力と栄えということが、力と栄光という形でどちらにも入っていますけれど、王の力の働きと御霊の力の働きというのが、この力と栄光があるこの中ですね。この力という働きが、1章と3章で違っているということも見えるかなと思います。

御霊によって力を得ますというのは、イエス様が天に上る前に約束してくださったことです。使徒行伝の1章8節で。御霊が送られたら力が与えられる。それでステパノは恵みと力に満ちていた。この御霊の力ということがこういう箇所からも分かるかなと思います。

全体の構造の中での祈りの箇所を見ているわけですから、この3章の前半と1章の前半の組み合わせでももちろんこの祈りを見なければいけないわけですね。1章のこの段落と祈り、3章のこの段落と祈りということですので、その全体の中での祈りの役割ということも見ていかなければいけないとは思いますが(グレー枠、ブルー枠)、基本は恵みと平安、愛と知恵のような区別で、この祈りがまとめられて捧げられているものだと思います。